特54
45
認可

新編都草紙

第八編

伊東專三編輯
橋塘

月岡芳年画図

毎月出版日

四日
九日
十四日
十九日
廿四日
廿九日

新板御披露

橋塘伊東專三編輯　魁齋大蘇芳年畫圖

花春時相政

前編　七月一日出板　定價一部金廿錢

本編ハ四方諸君より山の如くに注文に預りし明治俠客箱屋町相政老人の傳にして伊東先生が得意の快筆大蘇先生が年來の馴染に依て卷中の人物ハ殘らず寫生に致し通情の讀本とハ自から異れり弊舗幸ひ兩先生とハ知己なるより所謂親類交際を以て畢生の妙筆を揮ひ彫刻とも緻密に致したるに依り大きゝ出板の期ゝ遲れ府内及び各地方より續々とに督促ハ累積致し恐縮の次第に之なりハ所漸く發兌に至りたれバ陸續御購覽の程偏に希ふ

發賣元　日本橋室町三丁目　**滑稽堂**

右の書册ハ弊舗に於て大賣捌仕りハ間ゝ花主方ハ配達人よりお求め下され度又はがきにて注文あれバ早速に届けヤし上ハ間に注文お求のほど希ひ上ハ

新編都草紙本店　**著述堂**

伊東專三披閲　山田仙魚編輯　大蘇芳年畫圖

日本橋浮名歌妓

一冊讀切極美本　近日發行

此書ハ此程惰死せし藝妓叶屋歌吉と吉田屋安兵衛の事跡を眞を採り虛と去り未だ新聞紙にも載さる耳新しき奇譚を集め披閲者伊東先生の事までも編り込み血沙お染たる書畫の筆の命毛終るまで末期の泪を硯お受ゞ爲永流の人情本に物せられたる稀代の新版聞取傍聞の無暗書お事實を誤る出鱈目本とハ情客と惡足はどの相違ある最面白き草紙おれバ發兌れ弘めの日を待て諸君一本買て頂戴と只今からのお約束

發兌元　日本橋室町三丁目　**滑稽堂**

明治十六年五月廿四日ハ届同七月九日出版（定價金四錢）

編輯人　東京府平民　伊東專三

出板人　日本橋區本石町一丁目廿六番地　福井縣士族　岡規

發賣所　仝區同町廿一番地寄留　日本橋區本石町一丁目廿六番地　**著述堂**

○島衛沖白浪　第八回

三歳子の魂ハ百まで と世の俚諺ゝ言るが如く幼稚立より其心の邪ゝ悪とて庄吉ハ三日月小僧と片書附の巾着切と成おはせしも未だ十五お滿ざる少年然れども佐原の喜三郎が情に感じ慈義の金三十兩ゝ足を洗ひ土浦へ向け出立せしと本故郷なる頭の許へ歸りて其夜ハ大勢の仲間を集め酒と汲み身祝をゝしいよ〳〵明日ハ土浦皆次の所へ行と語れバ仲間も庄吉の出世を喜ゞ物おから久しき馴染に別れを惜ひハ人情然こそと知れたり其夜も更て盃盤を治めて各自臥所に入り三日月小僧も枕に附きけり當時兩國浅草邊り人の出盛る盛り場にハ巾着切の多くありて諸人の難義と成ること有れバ一度に刈込所刑をせんと上にハ評議の有りしする明れバ三月十九日の朝手分をゝして其筋より各所へ一度にお手入ありけり此時庄吉ハ松阪町を立出て横網へ出で土浦まで行んとゝしたる其途中豫て目星を附られゝる土地で名代の兇見るれバ第一番に召捕れ入墨のうへ佃島へ遠島とこそハ成にけれ三日月小僧ハ思ひ掛おき途中の捕方脱れがたく阿容〳〵縄に掛りつゝ憂島守の寄場の苦役一日早く土浦へ立たら斯る不甲斐おき目に會物でハ有まいゝ今と成てハ佐原の假父が忘づくしも水の泡大方先へお出にて待てゝ有らう辭ねへ事だ如何ありとして此島を破つてわとから行たい物だと思ひ腦ど如何せん鳥ならねども網に入り獸おらねど狩場に在る身ハ之れ羽翼と借ざりせバ出る事さへ成ざるより日々に役目ハ爲おがらも頼りに便宜を窺ひ見るに鎭炮洲おる五軒町へ出んとすれバ漁師町ゝ見張が有ゆゑ自在おらず此一方を除く時ハ海路遥に涙荒く這入バ身躰ハ氷底の氷屑と成んと思ふが故如何ハせんと取慌つ思案に胸を苦ませ其所か此所かと猶よく思へバ此島が根の西に中り新地の端と稱ふる所ハ瀬も淺きゆゑ立游きを爲バ自由に脱れられん嗚呼よき場所をバ發見たりと一個心に喜ゞ物から案知ぬ涙して神妙に役と勤てをりたるより誰とて是なる庄

吉が島を破らん心ありと知者更にあかりけり兎角するうち其年の春去り夏も僅にあり水無月末ゞ成たるに燃るが如き暑さへ厭ふ事あき地獄の責朝未期より夕を掛け仕事い烈しき阿鼻叫喚夜に入ゞとく灯火もなき黒暗地獄い蚤蚊も多く身躰を刺るゝ劒の山斯る責苦も身の罪を其身に迫らる應報と思へど日々に照つゝく暑に堪かねたるとり或日朝より空かゞ曇り雨降出しが暮てよりい風さへ次第ゑ加りて海鳴渡る大嵐し初のほどい久し振の雨ゆゑ少し涼しさを覺えたりしと一同が喜びをりしが嵐と成てい又今更に怖さを覺え一つ所に塊り寐て話しの聲さへ度絶けり其夜も更て丑三近しと思へる頃まで寐もやらず窺ひとりたる三日月小僧首をもたげて四邊を見れゞ雨いますます降しきれど風い大きに凪たる故にや畫の勞れゑ一同い前後不覺に寐入たる節ころ能と窃に起出雪隱へ行く体にもてあし中へ這入て掃除口よりやう〳〵戸手へ忍び出れゞ降來る雨に身体の汚穢を洗ひ落して臭氣もあきゑど片頬に笑て眞黒闇を探りあがらゑ鎖地の許へ忍び寄つゝ乘越て行ゞ茲にも又一重鎖地のあるい豫てより案内知たる島の要害是さへ難あく乘越て外面の方へをり立ゞ目にこそ見ねね涙の音はや海近しと思ふより策矢來をゞ押破り出れゞ茲ぞ岸あれゞ胸を定めて筋斗打ち樓と計りに飛込しが思ふにい似ず遠淺ゑて水い毫も有ゞこそ深田に等き泥の中へ足を突込抜ざるより兩手を登てかい探れゞ抗の有しゑ幸ひと夫に便りて抱き附きやう〳〵足をゞ抜たるとり島内俄に騒がしく人聲親しく聞ゆるゑぞ原來吾儕の島脱が露れたるのと思へども水のなゐれゞ游ぎ出脱れかねるゑ困りしかど驚きもせずゑ仕着を脱つゝ泥の中に踏込み裸躰ゑ成て石垣と涙除抗の間に窃み窺ひねれゞ島内い早晩鎖り雨さへも晴て次第に明近く永代橋より見え通る白壁造りの灰屋が家の職人もはや起出て仕事に掛りし頃あるか海の面へ燈火い差し来らむ東に塒を離れ啼て飛交ふ群鳴汐い上總の沖より上て岸を洗ふゑ至りしかゞ游ぎ出るい安けれども海面次第ゑ明るけれゞ茲に便りを失ひて如何いあさんと思ふをり向ふの方より古びたる虎子の一個流れ來るに是幸ひと天窓ゑ冠り新地の端を目的とゑし向ふい見えねど抜手を切り身躰を隱して游ぎ行ゞ但見る虎子が流れゆく如くに見ゆれど差て來る沙ゑ逆らひ行さまい最可笑くも思いれたれ三日月小僧い五町ゑさりの新地へ游ぎ附しより虎子を捨て四邊と見れゞ此時全く夜い明離れ日さへも已に登りしかど未だ往邊の有らぬを能とて裸躰のまゝにて岸へ登り足を早めて洲崎ゑる土橋の許まで通行しが向ふの方より人影の見ゆるに驚き側を見れゞ雪隱あるにぞ共中へ這入て暫し隱れけり今此所へ來りしい木場邊にゐる川並の小僧に有可し年の頃も三日月小僧と同じ程にて大紋附の伴纏ゑ盲目縞の股引腹掛三尺帶に手拭を狹みて通り掛りしが用と達んと雪隱の戸に手を掛しが其中ゑい人の有ゆゑ行過んとする容子とゞ中ゑる庄吉牛戸の間より夫と見て疾も思案定ゞつゝ

中ゝりひらりと跳り出やらしも敢ず首筋取て雪隱の中へ引摺込わぞ小僧い驚き騒ぐうち巣が腰ある手拭を取より疾く咽喉へ巻き力を究てゞ上れゞ聲さへ立ず虛空を掴み其まゝ息い絶にけり庄吉い見て莞爾と笑ひ先手拭と解捨て死骸の伴纏を剝取つ裏を返して身に纏ひまた腹掛の懸しに有し錢を奪ひて版鼻輝に殘らず包み身ゝ附て三尺帶を確乎と締め役手拭ゝて頬冠りをゝして面を包みつゝ川並小僧に扮担て緩々其所と立出しい大膳不敵の擧動なり斯て其儘庄吉い仲町へ出永代橋を渡りて此方の八丁堀まで來れゞ腹の空しを覺え其邊にて朝飯を喰て築地の門跡の裏手へ來れゞ此近所の酒屋の丁稚に有ある可し是も年齡い庄吉と仝じ程ある一個の小僧天秤棒にて擔ぎ來りし御膳籠をゞ道の邊へ却して棒へ腰を掛け他目もふらず錢勘定をゝしゐる姿を認たる三日月小僧い何やら思案し四邊を見れゞ此所い往來稀ある淋敷場所とて人通りさへ非るゝど序能なれと側へ立寄酒屋の丁稚の胸もと取ヤイ此間い已れよくも吾倘をゞ酷い目ゝ合したナと言より疾く握り固し拳を揭て目と鼻の間を發失と打たるにぞ何ぞ溜らん彼の丁稚いウンと計りに俯向倒れ其まゝ息い絶にけり三日月小僧い前後見るがら丁稚の衣類を剝取て伴纏脱捨手早く着代帶さへ締て其邊に落ある錢を拾い集め財布へ入て其紐を首に打掛懷入に納て籠の其中より繩に括りし備前德利と四五本出して兩手に下げ今迄人に繩取をされしが繩を取たのいそも〳〵今日が初てだ此姿あら雖あつて氣の附ものも有まいと洒落混りの獨言銀坐通りの方へとさし一町ばゝり行すぎたる其節向ふの方より來るい當時の加役の其中にて暴いと人の噂わる本鄕本町に住ひ手練の武士饗庭重右衛門にて手代藤兵衛と下男一個を供に連れ此方へ來掛すれ違ひ今のい惜に三日月小僧の庄吉といふ奴でいないゝと問ゞ藤兵衛い氣も附ねゞィェ三日月小僧い此間お手當ゝ成り只今い寄場に參つてをりまするど答へし物も年端の往ねゞ島と破つて此邊を歩行いせまじと思ひしあるべし

○唐土模樣倭粹子　第八回

信濃國輕井澤驛の脇本陣い志村屋となん言る家にて主個の名を太平といひ女房お美津との二個が中に新吉といふ一子を擧け今年天保二年にい十歳にあり父親い五十年の上と越しとて里に古老の名ある耳かい代々茲ゝ住居を占め驛の振合武家方の御用の筋の勤ぶりも能心得てをるなれゞ里人自然と尊敬して志村屋太平の頭字を雖取ともなく志太老と敬いるゝ程太平いあゝ其身と迫て宿の事に心を用ゐずと言ことあく然れゞ其年の師走二十日昨夕よりして雪降りしきり野山も一圓銀世界と成しものから今朝早く立出る客に頼れたる用事を磯と忘れたれゞ行て濟せて來んものと家の老僕に提燈を照させ急ぐ在鄕遣庚申堂の邊へ來れゞ路傍に女い切殺され傍に小兒の泣ゐるにぞ拾ひ上しが此事を我家へ傳へて女の死骸を葬りやらんと思へども一個茲に殘りゐるが不氣味に依て頷と合し困じ入たる其折から繩手道より馬を追ひ宿の方へと行んとする馬立客を乘る馬士の來りしにより志太老いコレ〳〵と呼止て此始末をゞ物語り此由我家へ告たるうへ竹輿と舁せて參るやう言置直に其足よて驛役所へ出代官所へ訴へ檢視と願ふやう傳へて呉と物馴し言葉の上に豫てより平常出逼入脇本陣の主人の事ゆゑ馬士い容子と見聞し驚きあがら畏まつてゞ行よけるあとに主從兩個い庚申堂にて待間程あく彼馬士の傳言に依り志村屋よりい竹輿を舁せ代官所よりい檢視の武士お驛役人の附添ひ來り死骸を篤と檢めて此始末あど問たるすゑ賊の手がゝり有もやせんと其所等を隈あく探したれゞ夫ゞと思ふ物もあく小兒が腰の巾着に附たる少き迷子札に郡塞藏の息子理吉と記し有耳あれゞ檢視いつく〳〵是を見て原來此子い松代の町奉行郡塞藏の一子ありしか彼塞藏いッィ此頃嵐山花五郎といふ博徒の爲に一家五人殺し尽され仇いまた其場より遯轉せしより夫が行衛を求るため茲等へ沙汰も有たりしが其塞藏にい一個の妾の有てお光といひ已お子までも出

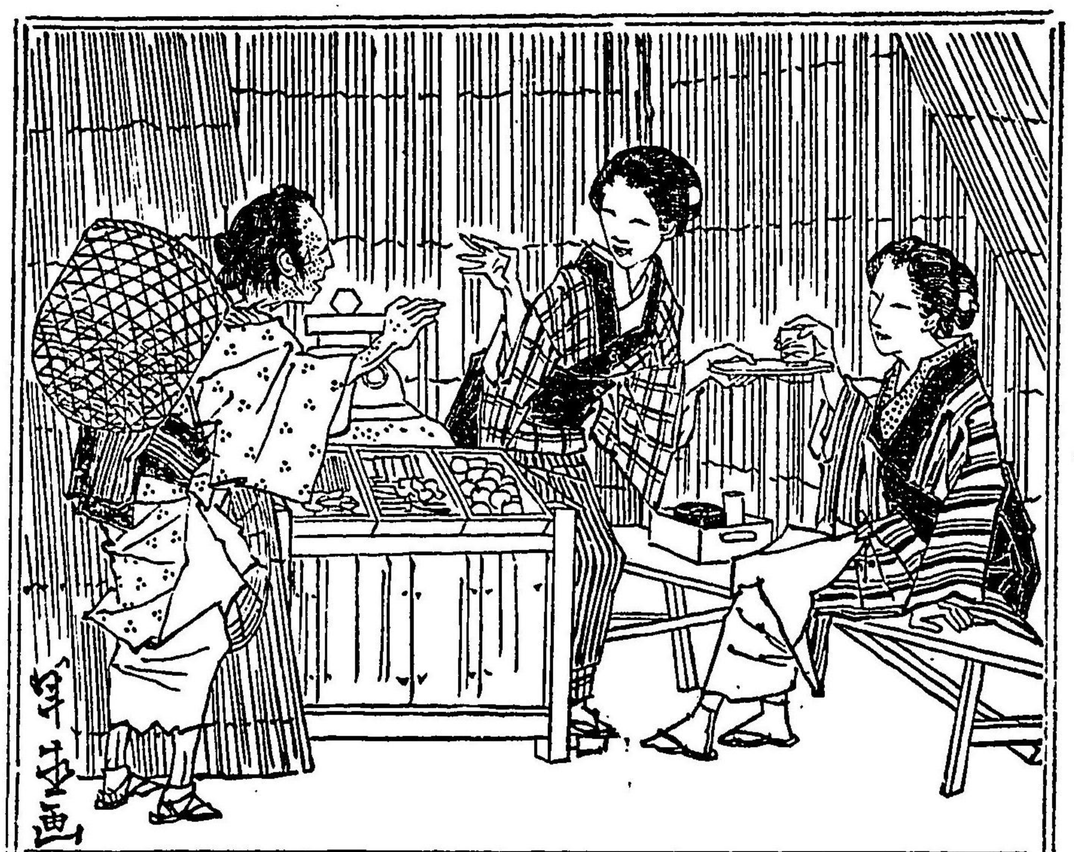
來しと聞夫なる女ハ嵐山に討漏されしが此國の生ゑあらぬ江戸の者にて其所にも親類縁者ハなく主個ハ博徒に討れしより家も斷絶したるを以て城下と迷ひ出しとやらん聞たる事も有しなるが想ふあ是がお光ある可し然れバ死體を引取て葬るもまた小兒をバ養ひ育るも妨げあし上でハ賊の行衛をバ探りて所置と爲べしと詳細に述べ驛役人を從へ檢視ハ立かへる此盲樂に依り志太老ハ母子の上を僂に知バいよ〳〵不便の心が增し舁せし竹輿へお光の死骸を打乘己れハ理吉を抱き先に立つゝ我家へ歸り妻にも此由語り聞るにお美津もいよ〳〵便なき事に思ひて夫婦老實ゐ我香華院へお光の死骸を厚く葬り跡吊ひ理吉ハ息子新吉の弟となして愛育するゐ疾くも九年の星霜經て實子新吉ハ十七歳養子理吉ハ十歳にあり何れも事あくて育しが新吉ハ生質色白くして筋骨逞しく義俠の心深き耳か劒術柔術も師道を取て習ひ覺ねし手の中尖く市人にハ似ず問さへあれバ裏の明地へ驛の中の壯者あどを集めて

ハ竹刀と用ゝせ綿を廻せ我敵手として樂むより父母ハ宿屋の息子にハ似合しからずと折々ハ意見をすれども新吉ハ更に用ゐる氣色ハなく未だ夫のみに非して雪と欺く肌の脊中へ九個の龍の刺繍せしより雖言ともなく九紋龍の新吉とこそ稱へたれ夫ゑ引かへ理吉ハまた流石ハ郡の胤はどありて育つに從ひ意曲け惡き友とのみ戯れ遊び其遊びさへ勝負ごとの眞似のみなして手習ゐどハ見向もあざる景狀ゐ太平夫婦ハ湖情思ひ和主の父ハ如樣〳〵和主の母ハ如樣〳〵と身の上を說聞せ諭す物から毫も聞ず空嘯いて聞走らせ用ゐる景色ハなき耳かハ反つて家の夫婦を怨を吻きをりてハ下婢下男に中り散すに夫婦ハ呆れ此奸曲を見聞する義兄新吉ハ義氣凜列志操淡白の者ゐれバ理吉が邪ゑを憎みつゝ打据る事も度々ゐをバ理吉も兄の新吉と深く恨て兄とも思はず義兄弟いよ〳〵中惡けれバ太平ハ困じて理吉ゑ向ひ種々意見とする物から和主ハ毫も用ゐねバ今ハ我家へ置難し依て聞ねと有あれバ親不知にして何處へなりと遣てしまふが夫でもよいゝと威せど聽せど肯入ざるにぞ夫婦ハ是に愛想を尽し他人ゐ遣んと方々へ賴おくうち出入あす旗魚屋の重助が上州高崎の九藏町にて信濃屋といふ立場茶屋で幼稚が欲いと言しゆゑ其所へ話しをして見たら欲いと言が如何物と問バ太平ハ然らぬだに持餘しゐる理吉あれバ一諾に及ばず承知して先ハ何でも攫どぬゆゑ然いふ譯ゐら遣て下さい素不知親の事あれバ餘育料ゐ十兩の金を附れバ此方の名前ハ。ハテ夫あれバ入ぬ心配探て話しの有た事もゐ此方の名前ハ盲もせず信州邊の宿屋の息子と盲た許りで有ますゆゑ幼雅ゑも又途中ゑて口の合やう吩附ますと萬事呑込重助が盲樂に太平ハ喜びて十兩の金と理吉の外に金壹兩の骨折代をバ遣しゝに重助受取九歳の理吉の手を引き出行たるハ天保十年の四月ありけり偖も其後新吉の武藝ハ追々上達あし驛の中ゑハ歐手ゑする者とてあしと此頃ハ一人庭の明地へ出で棒を遣ひて樂みをり其年六月十五日の夜も

盡の暑を忘れんと庭内へ出照月と眺て暫し涼みをりしが今日ハ朝より事の多く未だ一手も遣はざれバ何ともなしに忍地あしゝィデ一棒を試見んと月に浮れて棒取立頻りに遣ひゐたるうち誰とハ知ず柴垣の彼方より人の聲ありて可也ゐ棒ハ遣へども我流の藝にて法に就ず笑止〳〵と高らかに打笑ふ聲聞ゆるよゞ新吉ハ聞咎め小手を止めて彼方ゐ向ひ今此土地ゐて手に立物ゐさ九紋龍の棒の手と笑ふ汝ハ何者ぞ此所へ來りて一棒を喰つて見よと詈るよ柴垣廻りて出來るハ年の頃四十年餘り大兵肥滿の法師よして鼠色ある單へ衣を着して腰に鉄如意を狹みしなきば新吉ハこゝに意外の人物と呆れて言葉もゐかりけり登時僧ハ此方に向ひ野僧ハ諸國巡脚の僧にて今日しも計らず此家の門を過りて回向をせしをり明日ハ先祖の建夜ゐ中れバ今宵の舍りを法捨せんと言るゝよ依り佛壇の經を濟せて齊時に附き寐るよも未だ早けれバ月景清さよ漫にも涼みに出て柴垣の藤より見れば棒の手の餘りに可笑覺えしがば思はず笑ひ出せしも出家でこそあれ其以前ハ劍術柔術に執心にて習ひ覺えし藝あれバ盲ともゐしに盲出しが聞咎めらを面目ゐさよ然ども和郎も箇程まで執心なりせバ愚僧の手の中一手ハ指南致さうかと泰然として演たるよ新吉再度癪と怒りはざきたり此賣僧父が法捨の戒若湯に醉しか汝ゆるし難し然程廣言を吐ありせバ我此棒を受て見よと言より早く棒ひらめかしヤト聲掛て打込を心得たりと彼僧が腰ある如意を拔取て發矢と受止む手煉の精妙又打卸しを左へ退け右へ違はしかい潛る其早業に新吉ハ漫り難しと思ふものから如何もゐして打据んと精神ますます加りて飛鳥の如くよ働けバ僧も肥滿の身躰に似氣ゐく彼方此方と飛違へゃゝ二時ほど戰ひしが少も勞るゝ容子もゐなれど新吉次第に勞れを覺え汗ハ淋漓と身躰を侵し棒の手ハやゝ亂れゆさ己に危く見えたりける乍應此旅僧ハ何者ぞ看客大略ハ推しつらんが猶も委敷しらまく欲せバ开ハ第九回の卷端に解分るをバ聽ねかし

○色濃緑笠松　第八回

歸り來りしお松を見て傳吉ハ最笑まし氣に無塞かつたで有しならんと思へバ酒を買て置たと言れて此方ハ禮を述べ火鉢の邊へ坐を占て今日安田樣へ參りし所ろ孫の外ゐる他機嫌にて久し振とてお酒なども出しよ依て節よしと夫婦が長の病氣の事より打續いたる薄命をお話しヤし上たところ安田樣ゐも氣の毒よ思し召れて是此通り五十兩といふ大金をお貸ゐされて下されて是ハ返すにハ及ばぬと他深切ある言葉に甘へてお借ヤした上白木へ廻つて秩父とバ一反買く來たるもゐ大きに遲く成ましたと言つゝ小判で四十九兩並べて見せるに傳吉ハ夢かと計り打喜び此容子でハ追附に間が直つて能らうと言バお松も諸共に春の仕度の何くれと語り合てハ飲酒も殘り少く成もさて初夜近しとも覺しき頃どつさり音して門の戸へ當りて瓦羅利と引開つゝ轉ぶか如く家の中へ登る一個の男あるにぞ夫婦ハ吃驚しゐがらも眼を定めて能見れバ假子れ勘太でありしかバ傳吉ハ目に角立怪たゝましい何の事だ日外よりして間が悪く此樣姿ゐ成てゐれバ汝等までが又喧嘩でも爲て歸つたか氣と附ろと言バ勘太ハ首と振りィエィエ其樣事でハは坐いやせん今夜吾儕が八丁堀の幻源太親分の家の二階に遊んでゐると下の坐敷で親分が本所の傳吉の假子の者ハ一個も茲にハゐめへゐれど今日傳吉の女房のお松が白木で五十兩の金と搖つた事故を疾くも其筋へ聞込たゆゑ是から召捕に行ねバ成ぬと大きゐ聲で言れたので吃驚したれど能思へバ日頃假父と中の能幻假父が吾儕の居るのを知てゝ大きゐ聲で言たハ早く遁せといふ謎ならんと推了したので聞より直八丁堀を出ると其まゝ宙を飛で知せに來やした疾く茲とバお脫ゐさへと息次ゐへず語り了り身躰の汗を掛ひながら温茶よ咽喉を潤はせり此注進を聞うちに傳吉ハ面色代り途方に暮て案じゐるお松を取て膝下に引附安田樣から借て來たと言のハ已れ僞りにて四十九兩ハ白木にて騙つた金に相違ある



まいコレお松能く聞よ此傳吉い世の義理よ屋敷を出て人入を家業とすれども天下の旗本廣掛兵庫が嫡男にて夫に連添てまへもまた筋目正しき稲毛の娘ことに大望有身ゐるに如何貧苦よ迫れゞとて搖り騙りの惡業おし汝ばかりか本夫の顔先祖や父母の位牌まで泥を塗たる不所存ものめと怒りの聲もうるませて無念の泪とら〳〵とら襟掴取てお松の面部を其所の席薦ゐ磨り附け向ふへ桙と突放す本夫が怒りも道理とお松い泪に暮ゐがら惡きと知ど此貧苦を見るに忍びず正可の時の用意と持て居たりし小判を種に白木屋で如何も搖りをしましたが夫も貴下のお爲と思ひ爲たるい女の淺き智惠今い反つて災害の根と成しか面目あやお許しあされて下さいと言つゝよゝと泣沈む妻の眞情に傳吉も夫ゐど迄に身此を思ひ斯る所業と爲しかと思へゞ一時の怒りも解け默然としてゐたりけり勘太も容子と打聞て又今更に驚きしが傳吉夫婦ゐ打向ひ姉公の搖りも假父の爲ゆゑ惡事と働きしが假父いまた顔とづく

にも抱る事とて怒らるゝ何を何お分かねれど其樣ことにて時刻を移さゞ幻假父の深切も吾儕の忠義も水の泡捕人の來らぬ其中に早く此場を落延てと促す言葉に傳吉い實ゐもと思ひ氣を取直し免も角こゝをゞ落たる上と四十九兩と三個に分け夫婦交に二十兩づゝ肌に附命餘りたる九兩と勘太の腰に附け身仕度すれゞお松もやう〳〵泪と拂つて損料の帶ゞ直す節こそあれ幻源太い多くの假子を從へ此家へ打向ひ門の戸踏放しば聢〳〵の聲諸共に込入たれゞ此方の三個い忍得たりと暫しい防ぎ戰ふうち行燈蹴かへし鳥羽玉の暗を幸ひ裏口より行衛も知れず落行ける源太い素より縛捕心あけれゞ深く追ふ假子を綱め引返し傳吉方へと向ひしのど風を喰て夫婦ともはや落失たる跡なりけりとやし上しに上にてい猶も行衛を探させける偖もお松い行燈の消しを幸ひ裏手へ出二十日の月のまだ登らぬ闇を便りに其所ともあく四五町遁いなしたれど本夫も勘太も跡より續かず想ふに首尾よく何れへか遁延たるか夫ともまた捕へられしか如何せしと思ひ惱めど問ことさへも成ざるゆゑに案じわび行つ戻りつ一所を彼方此方と彷徨しが斯ゐを中に此身もまた追手掛らゞ悔るも詮おし譬へ一時る別るゝとも互ゐ命の愛度あらゞ何かい巡り會ことあるべし然じや〳〵と綱言さして行方い有らざれども繼母のお政い丈五郎と夫婦ゐ成く川越ゐねるよし仄に聞たれゞ是へ便りて身を忍ばんと踵を巡し淺草へ出つゝ道を西に取り二里にい餘る中仙道板橋驛まで急ぎ行其夜い最も汚穢ゐる宿屋と見立て窮に泊り翌日其所を立出て大和田の驛に舍りをもと先二日目にして川越近き大口村へと來りしい其日も已に末刻下りお松い大きに草臥と覺ねしのみか此先の道さへ遠きも近きも知ねゞ此所等で休んで聞んものと側を見れゞ掛茶屋在り飴菓子煎餅おゞ併べありて女房一個其所ゐをり休ふ人もあらざるにぞお松い茲ゐ立入て床几に腰と打掛をゞ茶屋の女房が汲で出す澁茶を飲で川越までの道の程をゞ問けるゐはや

半道と答へしかゞ大きゝ安堵し緩々と煙艸薫らしゐたるを向の方より一個の女笠と深くし裾端折草鞋穿て脊中に籠煎餅の籠を脊負此方をさして來りしが茶屋の前にて小腰を屈め笠取除れゞ這ゝ如何世に癩病といへる者にや眉毛睫も脱落て髮の毛さへも蓬にあり顔脛上り紫色の種物出來て膿汁流れ其穢さいとゝ方あくお松ゝ見やりく斯ばかり見苦しきよも羞ずして生命惜さや世の人に忌嫌はるゝも厭もせざるゝ是業病といふあらんと心の中ゐ思ひけり登時今の煎餅賣ゝ床几の端に腰と掛け日外ゝまた俄雨ゐ降込らきて恆厄介ゐおありやした間りでおく身の上話しの詰らぬ事をゐ聞に入たる面目おさと言ゞ女房會釋して何の其挨拶に及びませう雨もゐ思とず聞た身の上和女が悪いと言ゐがらお氣の毒だと貰ひ泣をゞ著しましたと言ゐがら茶碗に澁茶を汲で出せど婦人ゝ右左ゐく是を受ず此樣汚い吾儕が此お茶碗で頂いていと言を女房打消てイヱ〳〵遠慮ゝ入らぬこと和女ゐ上る茶碗丈ゝ別にして置ものもゐに遠慮をしゐでお飲りよと言れて婦人ゝ有難く押頂いて一口飲み斯いふ病ゐ取附れたも本夫の罰と義理ある娘と藝妓に賣たる此身の罰と思へゞいと空ふそろしく難義を渡すが責てもの罪亡しでゆ坐りませうと凋々として話しゐる容子を見れゞ面影とそ變り果たれ聲音物ごし繼母のお政に相違ゐしと思へゞお松ゝ側へよりモシ餅煎餅を賣ゐ方和女のお名ゝ萬一してお政さんと言ぬかへと問れて婦人ゝ打驚き言葉ゝ無してたゆつすがめつお松の顔を打見やれゞ十三のとき別れたる耳にてあれゞ十年を過るものから何處やらに殘る娘の幼雅顔然いふ和女ゝお松かと一度ゝ驚き一度ゝ喜び籠を側へ下す間さへ疾しや遲しと駈寄てあつかしきさま〳〵寄添んと爲たりしながら我身体の穢きゐ羞ぢ寄もせず地上ゐ伏て面目おやと言より外に言葉おく襤褸の袖へ顔を當てよよと許りゐ泣沈みし後の話しと繼母お政が此体爲の譯ゝ如何次の回に委詳に解く可し